

フィルムは横向きに走った

—— 幻灯上映に寄せて

岡田秀則 (映画研究者)

江戸後期、長崎を通じて日本にもたらされた西洋幻灯 (magic lantern) は、彩色ガラス板の図像を幕の上に大きく写して寄席の観衆を魅了した。亀屋都楽は、この幻灯機を手で動かせるよう木製の軽いものにし、日本独自の「写し絵」として、映画渡来までの視覚文化を率いた。そして1970年代。理科の教室では、顕微鏡で拡大した細菌の図がスクリーンに写っている。薄暗い中で先生は、カシャッ、カシャッ、と映写機にセットされた図像を一枚ごとに切り替えながら、微生物の生態を説明してくれる。パワーポイントが普及するまで親しまれた、いわゆるスライド (slide) である。

全くつながっていないように思われるが、日本人はこの二つを両方とも「幻灯」と呼んだ。しかしその中間に、日本の戦後文化を控えめに輝かせた、だが今は半ば忘れられているもう一つの「幻灯」があった。それが、映画と同じ35mmフィルムを用いた、ロールフィルム式のフィルムストリップ (filmstrip) である。同じとはいっても、日本で主に流通したものはフィルムが横向きに走る機構だ。だから、一コマにつき送り穴は8つ (35mm映画は4つ)。一作品が写真用のパトローネにすっぽり入るという小ささだ。映写担当者は、一コマ一コマ、紙芝居師のようにフィルムをスクロールさせながら台本を朗読する。それは、物語を乗せることができたばかりではない。学校の教材としても、社会

のルポルタージュの媒体としても有効だった。身近な人間の肉声を絡ませて、啓蒙やアジテーションの言葉とも親和した。社会運動や労働運動の場でも宣伝に活用されたのは、その手軽さが好まれたからである。

フィルムストリップは、「幻灯」が映画に接近し、やがて離れてゆくまでの、短い蜜月に成立したメディアだ。だが、その表現は驚くべき拡がりを見せた。その演出技法の深まりは、例えば『自転車にのってったお父ちゃん』を見ればよく分かる。しかしこのフィルムストリップ幻灯が日本のメディア研究の主題となったのは、ほんのここ数年のことだ。

その幻灯が、山形に戻ってくる。お披露目の“ショー”という意味合いもあって活動写真弁士・片岡一郎氏に台本の朗読を依頼した前回とは異なり、今回の特集「幻灯が映す家族」は、幻灯の研究グループ自らが朗読役を務める。戦後という、貧困と希望がないまぜになった時代の家族観と、そのイデオロギーを呈示する上映になるだろう。『にこよん』が労働者の困窮を描く一方、『トラちゃんと花嫁』や『痛くないお産』は、途方に暮れそうなほどの楽観主義に貫かれていて、むしろ潔い。そんなところにも、戦後の新時代にふさわしい、小回りの利く自在な伝達の力が感じ取れるはずだ。

■上映

幻灯の映す家族【YF】 10/13 10:00- [M2]

山形市滝山村の農家をモチーフにした幻灯作品『嫁の座』(1954) など、結婚から出産、農村から工業地帯まで、さまざまな戦後の家族像をとらえた1950年代の貴重な幻灯スライドフィルムを上演。